

# 震災と夢野久作

伊 藤 里 和

はじめに

——一九二三（大正一二）年九月一日、午前十一時五十八分。

昼時のどかな日常をふいに未曾有の大地震が襲った。地震の規模はマグニチュード七・九、震源は神奈川県相模湾北西沖とされ、被災地域は東京、神奈川、千葉、埼玉、茨城、静岡、山梨に及んだ。このうち、最も多くの住家被害を受け、死亡・行方不明者が発生したのは東京市、次いで横浜市であった。<sup>(1)</sup>これが現在、関東大震災と呼ばれている近代史上記録的な大災害である。

この災害は当時「大正大震災」とも呼ばれたが、この呼称は地震そのものによる被害に加え、火災の被害もそれ以上に甚大であったことを物語っている。地震発生時刻がたまたま昼時だったことも災いして広域にわたって大規模な火災が発生し、多くの死傷者と莫大な経済的損失を受けた。その有様は写真や映像、そして有名無名の書き手たちによる多数の文字の記録として、忘れ難い大惨事の記憶を今に伝えている。

大正から昭和初期にかけて、主に探偵小説誌上を舞台に活躍した作家・夢野久作もまた、この災害を現代に伝える貴重な記録を遺し

た書き手の一人であった。社会を揺るがす大災害に直面したとき、「物書き」に何ができたか。その一つのありようを、夢野久作を通じて見てゆきたい。

一

夢野久作は一九一九（大正八）年から一九二六（大正一五）年まで、新聞記者として九州日報社に在籍していた。『九州日報』は現在の『西日本新聞』の前身であり、一八八七（明治二〇）年に福岡を拠点とする政治結社・玄洋社の機関紙として創刊された『福陵新報』を前身とする。『福陵新報』の創刊にあたっては、玄洋社の頭山満、結城虎五郎の他、久作の父・杉山茂丸も資金調達に尽力している。<sup>(3)</sup>久作は父の縁故により九州日報社に入社し、記者となったのだった。

『九州日報』在籍時代、紙上に発表された記事の多くは無署名のため、久作が手掛けたものすべてを特定する事は困難だが、中には署名によって久作の記事と判明しているものもある。<sup>(4)</sup>特に関東大震災をめぐる、特派員・杉山泰道として震災直後の様子を記した報道記事「備後丸より」全三回（一九三三・九・一一―一二）を始め、ルポルタージュに「大東京の残骸に漂ふ匂ひと気分」全三回（一九

二三・九・一五・九・一七)、「変つた銀座の姿 焼跡細見記」全二回(一九二三・九・三〇、一〇・二)、「残骸の東京 焼跡細見記」全一回(一九二三・一〇・五)、「変つた東京の姿」全四回(一九二三・一〇・七一〇・一〇)がある他、短い解説を付したスケッチに「東京震災スケッチ」全二四回(一九二三・九・一五一〇・一四)、「復興の東京スケッチ」全八回(一九三三・一〇・一六一〇・二七)がある。その後、震災から一年経って杉山蒨園(または蒨園生)の署名で書かれた記事には、随筆に「極端な個人主義 関東大震災の回顧」(一九二四・九・二・三三)、スケッチに「新東京スケッチ」(一九二四・一〇・一九)および「震災一年後の東京」全九回(一九二四・九・九・九・二三)、ルポルタージュに「一年後の東京」(一九二四・九・一一)、「街頭から見た新東京の裏面」(一九二四・一〇・二〇・二二・三〇)、「東京人の墮落時代」(一九二五・一・二二・五・五)がある。

関東大震災の発生当時、久作は鉤虫症(十二指腸虫症)の治療のため福岡市内の古賀胃腸病院に入院中であつた。震災の第一報を知つたのは一九二三(大正二二)年九月二日、地震発生の翌朝のことである。後年の回想録には次のようにある。

看護婦さんがお薬を盆にのせて、九州日報と一緒に持つて来たから、お薬のカプセルを掌に入れ乍ら、私は何気なく新聞を抜いた。

東京の大地震……火事……全滅……曰く何……曰く何……と、事実とも思はれず、嘘とも考へられぬ様な、極端な形容詞が一面にた、きつけられて、紙面の表情がさながらテンカンを引いた様に見える。私がそれを見てウーンとうなつて居る処へ、院

長さんが這入つて来て、「お薬を飲んだか」と聴いた。私はムツクリ起き上がつて、院長さんに「三百円貸して下さい」と云つた。院長さんは面食らつて突立つた儘、「どうするのか」と聴いたから、「東京に行くのです」と答へ乍ら、私は新聞を院長の鼻の先につきつけた。(中略)

院長から三百円を受け取ると、私は又ジツと考えて、院長に「此金は返しませんよ」と云つた。院長は「あんたの香典にやるのだ」と云つた。私は大笑ひをして、勇気凛々と立ち上がった。

「極端な個人主義 関東大震災の回顧」  
(一九二四・九・二夕刊)

『九州日報』の震災第一報は九月二日、朝刊第二面のニュースとして扱われた。<sup>5)</sup>「東京附近一帯の大地震と東京及び横浜の大火災 光景慘澹死傷多数」との黒々とした大見出しに続き、「東京市大混乱の報来る」「大建築殆んど倒壊」「東京は阿鼻叫喚の巷」といった衝撃的な言葉が並び、非常事態の発生を報じている。その情報の多くは、横浜・東京方面の無線電信や電話が不通のため周辺各地から集められたものだったが、「震源地は長野県下に在るらしい」(長野電話)、「震源地は多分伊豆方面か」(大阪電話)、「地震の中心は富士山だとの説もある」(静岡電話)、といった具合に錯綜しており、状況はかなりの混乱を極めていた。また、この時点では「詳細尚不明」「情報を蒐集中」「詳細は未だ判らない」「尚詳細は電報電話不通の為明かでないが」などと伝えられる未確認情報も多く、被害の規模も未だ明確に把握されてはいなかった。久作は東京に父・杉山

茂丸や継母、妹たちが住んでおり、情報が錯綜する中でその安否が氣遣われたためもあったか、このような事態を前に病身をおして即座に出發を決意している。

なお、地震当日の状況が即日で全国へ報道されなかった大きな理由は、東京の新聞社の多くが被災したことにある。ラジオ放送が開始される以前の当時、報道の要を担っていたのは新聞だったが、『東京朝日新聞』『時事新報』『読売新聞』『国民新聞』『やまと新聞』『中央新聞』『万朝報』『二六新報』など東京の主要な新聞社は社屋の倒壊や火災によって即座に機能することができず、報道は途絶していた。わずかに被災を免れた『東京日日新聞』『報知新聞』『都新聞』が散乱した活字を拾い集めて手作業で小部数を発行し、社員が手分けして市内の要所に貼り出したり避難民集会所で無料配布するなど、地震発生の直後から決死の報道に努めたが、平常通りの新聞発行がなされるまでは数日を要した。

そのため、東京の新聞社に代わって地方紙が全国に震災の全容を伝える大きな役割を担うこととなった。『大阪朝日新聞』『大阪毎日新聞』『名古屋新聞』『新愛知新聞』など地方の新聞各社では東京との通信手段が寸断されたため、大宮・船橋・高崎・長野などを經由して無線電信や電話を継いで情報を本社に伝えた。『九州日報』も震災発生の第一報を受けて即刻記者を東京・横浜方面へ派遣したが、列車や通信の不通のため情報収集はかなりの困難をきたし、併せて在京中の社員が収集した情報を名古屋・長野・神戸・大阪などを經由して無線電信や電話で本社へ伝えている。九月二日発行の『九州日報』第一報記事には「此報は一日午後五時二十分非常の苦心を以て各地方の電話を接続して漸く接受した報道であるが其の真相詳細

は未だ判らない」とある。

久作が福岡を發つたのは九月二日午後二時、妻と幼い子供達には置手紙を残しただけの慌しい出發であった。<sup>6</sup>しかし一刻も早く東京へと向かった久作であったが、二日の時点ではまだ交通網が混乱をきたしており、東京へ向かう鉄道は悉く不通となっていたため、汽車で大阪まで出たのち、震災救助船備後丸に便乗して横浜を經由するルートで東京に向かっている。

『九州日報』では、翌三日より第一面から第四面までの全面で震災関連の報道がなされた。東京に戒厳令が敷かれたことや、救援活動の様子その他、近県を經由して集められた情報によって東京・横浜の惨状を伝えている。また、大阪支社で活動写真班を組織して東京に派遣し、災害実況映画を撮影、九月七日より福岡県各地で上映を行った。

二日に福岡を出發した久作もまた、船上で集めた情報を逐一本社へ知らせるべく努め、何度か無線電信を打っている。しかし後の回想によれば「あとで聴くと、みんな空中に放散したらしいとの事であった」とあり、混乱のさなか無我夢中で送電した情報はすべて届かなかった模様である。<sup>7</sup>「特派員 杉山泰道」として船上で書かれた記事が人手を介した郵送によって本社に届き『九州日報』紙上に初めて掲載されたのは九月一日のことであった。

記事末尾に「九月五日朝横須賀發第一信」と記された久作による第一報の記事（九月一日朝刊第一面掲載）では、四日から五日にかけての船内の様子が記され「色々な戦慄すべき各方面の無電来り、船中には殺氣が漲る。時に或は各地の無電交錯して、混線に陥ることがある」とあり、通信・情報の混乱ぶりが伺える。また「陸上は

無秩序に陥り危険甚だしい。東京へは其後の模様で方針を決定する」という事務長の通達を受けて船客が決死隊を組織しようとする模様や、横浜港への碇泊間際、「船中の人々は一斉に武装的自衛の身支度に取り掛る」など、船上の緊迫した様子を伝えている。

「九月六日午前横須賀発」とある第二信（九月一日朝刊第三面掲載）では、五日に船上から見た横浜港の光景を記している。「横浜旧棧橋は破壊され、海岸通り全滅。新埠頭も亦潰れて居る。構内建物や開港記念館、中央電話局等は残つて居り、八十九番外人館も残つて居るが、人のけはひも無く寂然たる廃墟である」「荒涼たる横浜の光景眼前に展開し、廃墟の如き浅野造船所屹立せるが見える」など、直に目にした横浜の惨状が伝えられる。

「六日午後横浜発」とある第三信（九月一二日朝刊第一面掲載）も第二信に続いて船中から観察した光景の報告であり、「横浜港の防波堤、燈台は全部破壊して居る」とある他、「逗子、神奈川の石油タンクから依然として黒煙濛々として昇る（前便後二十余時間を経過して居る）」とある。やがて東京が見えて船客の上陸準備が始まり、中には暴動に関する流言を受けて護身用の日本刀を携帯する者も数名居たことが記されている。しかし戒厳令に伴う入京制限によるものか「上陸は延期の余儀なきに至つた」ことにより、五日は下船できずに船中で過ごし、入京は翌六日となったとある。この記事の末尾は「サラバ……愈焦土の旧都へ！」と、さらなる惨状を目前にする覚悟と使命感に満ちた様子で結ばれている。

## 二

横浜港から海軍のランチ（人や荷物の輸送に使われる舟艇）に乗

り換え、品川の芝浦に上陸したのは九月六日、地震発生から五日後のことであつた。以降、東京市内を取材したルポルタージュは「大東京の残骸に漂ふ匂ひと気分」（一九二三・九・一五―九・一七）、「変つた銀座の姿 焼跡細見記」（一九二三・九・三〇、一〇・一）、「残骸の東京 焼跡細見記」（一九二三・一〇・五）、「変つた東京の姿」（一九二三・一〇・七―一〇・一〇）として『九州日報』に掲載された。また、絵が得意だった久作は多数のスケッチも描いており、これらも同紙上に掲載されている（図1、2）。東京の状況を視覚的に伝える資料が極めて不足している中、これらのスケッチは貴重な情報の一つであつた。スケッチには短文の解説が添えられ、火災により多くの犠牲者を出した被服廠跡を始め、焼け残つた動物を売る浅草花やしきの様子、丸屋根の落ちたニコライ堂、上野公園、数寄屋橋、明治大学、帝国ホテル、銀座、文部省、汐留、築地海軍参考館、飯田橋砲兵工廠などの焼け跡、日比谷公園その他市内各所のバラックなどが描かれている。

取材はすべて徒歩で行われており、「東京市内がガソリン大欠乏のため、自動車数が制限された上に、殆ど全部が其の他の救護通信に使用されている為め、材料記事を集めるのは、悉く徒歩に依らなければならなかつた」とある。仮にガソリンと自動車の都合が付いたとしても、市内はもちろんのこと市外へ通じる道路も多く寸断され、新聞記者たちは情報収集や伝達手段に非常な困難をきたしていた。中には『新愛知新聞』の東京支局の社員が名古屋の本社に原稿を届けるため、自転車で山を越えたという逸話もある<sup>9)</sup>。交通や通信が混乱を極め、情報が錯綜する中、人の口を介して伝えられる情報の中には信頼度の低い噂もあり、流言飛語を信じた暴徒によって朝



図2 「上野公園西郷銅像＝処嫌らはず  
貼り付けられた退札や行先札、尋  
ね札を引受けて威張って御座る。」  
(『九州日報』1923・9・23夕刊より)



図1 「被服廠跡の死骸焼き＝四角に並んで居るのは死骸  
に立てかけた薪。中央の旗は英国々旗。立番の兵士  
の服が鬼の様に見える。石油の臭気が鼻を衝く。」  
(『九州日報』1923・9・18夕刊より)

鮮人が虐殺されるなどの無惨な事件も起きていた。また混乱に乘じ、憲兵大尉・甘粕正彦らによって大杉栄、伊藤野枝、橘宗一が憲兵隊司令部で殺されるという事件も起こった。

しかし、そうした中で久作が記事にしたのは、その頃世間の注目を集めている出来事や社会的に重要な事件の真実に迫るような、緊急度が高く速報性のある内容ではなく、他ではまず取り上げられることのない局地的な出来事や一般市民の体験の聞き書き、自身の体験などであった。「残骸の東京 焼跡細見記」の記事冒頭には「茫漠たる焼け跡の大東京は総合的に紹介されて居るが、部分的には未だ多く報道されて居ないやうであるから、記者の眼に触れた、惨憺たる、有りのまゝの、変り果てた、哀れな姿を紹介することにする」とある。また「大東京の残骸に漂ふ匂ひと気分」「焼跡細見記」という標題の言葉にもあらわれているように、現場で体感した「匂い」や「気分」、実際に詳しく見て集めた情報を記録したルポルタージュとなっている。ここでは一例を紹介するにとどめるが、例えば以下のような記録がある。

芝浦第一号埋立地堤上の草の上に、顔色青ざめた男がしゃがんで居る。クシヤ／＼になつたバナマ帽、袖口の裂けた浴衣、新しい靴、長い竹の杖、傍に下した風呂敷包などから推して、避難民である事が直ぐ知れる。それよりも、その亀の様に表情の無い顔付きと、光りの無い目、それは九月一日正午以来の果てしない恐怖のあと、今日と云ふ今日、やつと避難船乗場の青葉上を踏み得た安心から来る疲労を、アリ／＼と見せて居た。喜びも無い、悲しみも無い、乞食でも無い、市民でもない、只

人間の形ちをして生きて居ると云ふ丈けの表情であつた。慄へ切つた東京の太陽の下からさまよひ出た空虚な魂であつた。

「大東京の残骸に漂ふ匂ひと気分」(一九三・九・一六)

六日の上陸後まもなく芝浦で目撃した一般市民の様子である。被災した避難民とみられ、疲れきつた痛ましい姿がまざまざと描かれている。国の要人の安否を知らせる情報が緊急に求められ次々と新聞で報じられるさなか、取り立てて名前を挙げられることもない匿名の一市民の姿を記録している。久作が自らの足で拾い集めた一般市民の声の記録をいまい少し挙げてみたい。

此の混雑と雑踏の街を、四十前後の、商人風の筋骨逞しい出歯の男が、「家屋につけた一万円の保険金は取れないさうだ。もう駄目だ。焼け糞だ」と怒鳴りつつ、誰れ彼の嫌いなくブツ突いて暴れ廻つて居る。追駆けて来た兵士から手とり足とりされて、タウトウ縛り上げて引立てられて行つた。保険金問題はかうして発狂させてしまつたのだ。まだ此の外にも幾多の発狂者を出してゐるかも知れないと思ふと、記者は何とも云へぬ重苦しい街の空気に吸はれて行く気がした。

「大東京の残骸に漂ふ匂ひと気分」(一九三・九・一七)

保険金の補償の見通しが付かず、情報も不足していたため、不安のあまりパニックに陥つた市民の姿を記録している。その後、補償に関する情報も一部発表されたが、支払いを要求する被保険者の運動は翌年にかけて激化することとなる。これも震災直後の貴重な声

の記録と言えよう。

また、日本橋魚河岸付近で火災に遭い、河に飛び込んで助かつたという市民の体験談が次のようにある。

「丁度あの辺で水の中から這ひ上つたのが、明け方の三時頃でしたらうよ。もう火事は済んでましたけど、往來は足がヒリ／＼して、おまけに火氣と煙で歩けませんでしたよ。(中略)それから何処へ何様歩いたんだか、気が付いた時はもう夜が明けか、つて居て、呉服橋の近所をうろ／＼して居りました。何でも途中で電線が死体か何だかに引つか、つて、何べんもぶつたふれた様で、左の掌と肘が今でもこんなに青くなつて居ます。

(中略)

それから、眼の前の鉄筋の共同便所のまはりに、何だか真黒なものが山の様に居ると思つたら、みんな死体でした。東京駅の貨車の火と挟み打ちになつて、共同便所へ一パイに逃げ込んだのらしいのです。彼の辺では、川へ飛び込まなければ、共同便所よりほか逃げ場はありません。それが一時に押しかけて一パイになつた上に、あとから／＼人の足の下へ頭を突込んだ儘すつかり蒸し焼きになつて居るんです。便所のまはりの死体丈けでも百位はあつたでせう」

「残骸の東京 焼跡細見記」(一九三・一〇・五)

江戸の台所として三百年余りの歴史があつた日本橋魚河岸は、震災時の火災により壊滅的な被害を受けて後年築地へと移転するが、この体験談は当時の火災の壮絶さを物語っている。これを聞いた久

作は続いて次のように記している。

と、自動車や馬車の音が轟々と往来する日本橋の上に、しやがれた静かな声で語った。其中に云ふに云はれぬ真実の響があつた。些しの誇張も無く粉飾も無い。夢ともうつゝ、ともつかぬ、有りのまゝの静けさと心細さを含んで居た。聴いて居る人は、其人足の汚れたシヤツと、茶色のパナマ帽と、浅黄色になつた腹かけの背中の十文字とを見まはしながら、それらの汚さに無限の敬意を払ふかの如くに一心に聴いて居た。羅馬の石の洞穴に基督昇天の実見談を物語る使徒彼得の言葉も、かほどの寂しさと素朴さは持つて居なかつたであらう。

#### 「残骸の東京 焼跡細見記」(一九三・一〇・五)

名も知らぬ一人の市民の口から語られる生々しい体験談を「云ふに云はれぬ真実の響」をもつものとし、その話を聞こうと集い寄る人々の眼差しにも、まるで聖者の言葉を受け取るかのような敬意の念を見出している。誰にも知られず、歴史の蔭に埋没しかねない市民の声を、記録に残すべき意義のある証言として拾ひ取った例である。

また、久作自身が体験した次のような出来事も記されている。

風の吹き廻しの都合かして、何か腐つた様なにほひが急に烈しくなつて来た。フト気付くと、樹の根と建物の床下の空気抜きとの間に、三尺四方ばかりの焼けた亜鉛版が置いてある。其上にスコップで一すくひ程、黒いボロ切れ様のものが散らばつ

て居て、中から白い肋骨が一本反りくりかへつて出て居る。正に人間の死骸である。否、死骸と云ふよりも、焼け腐れた肉の数塊である。頭も無ければ手足も無い。只、肋骨が一本ある切りである。みじめとか悲惨とかは通り越して居る。此処で弁当を喰ふ積りであつた記者も、出しかけたサイダを仕舞つて、ふり返りく／＼此処を去つた。臭気でも無ければ何人にも気づかれずに忘れられて居るであらう。路傍の木蔭の死骸——それは東京で初めて見た死骸として、記者の永久の思ひ出に残るであらう。噫。

#### 「変つた東京の姿」(一九三・一〇・七)

弁当を食べようとした場所が死体の傍だったという体験である。無惨な死骸が路傍に放置されているという事実、そしてそれが「臭気でも無ければ何人にも気づかれずに忘れられて居るであらう」という有様を、「記者の永久の思ひ出に残るであらう」としつゝ確かな真実の記録として記している。

こうして久作は新橋、銀座、築地と歩き「一続きの焦土となつて、町の境目さへ何処だかわからぬ」(二〇・二)という市内の様子を書き記していく。やがて父・杉山茂丸の主宰する商社があつた場所に辿り着き、建物は焼けていたものの「杉山全家無事」(二〇・五)の立て札を確認する。さらに汐留駅から京橋を渡り、伝馬町、中橋広小路を通つて日本橋へと歩き、「平生、東京の町を徒歩で行くと、非常に遠い様に思はれるのであるが、斯様して焼けた跡を辿ると、恐ろしく近い様な気がする。何処までも先が見え透いて居るからであらう」(二〇・五)と述べ、変わり果てた市街の様子を記している。

また、東京駅のガード下の煉瓦壁一面を覆いつくす安否確認の貼紙や各官庁のビラを「震災の翌日から六日までの全東京の日記の一種」(二〇・七)と表現し、「或は嬉しく、又は悲しく、万一を期して虚空に呼びかはし、尋ね合つて居る。一瞬間にわき起つた二百万市民の混乱悲惨、東西南北に逃げ迷ふた阿鼻叫喚の光景を眼の前に見る心地がする」(同)とその一つ一つを眺めている。突如一転した日常に困惑し、彷徨い、やり場のない悲しみを抱えた、名も知らぬ人々の言葉に耳を傾け、噛み締めるかのようである。

### おわりに

久作は徒歩での取材によって、被災した一般市民に寄り添い、声に耳を傾けた。その多くは記録する者がいなければ、歴史の蔭に埋もれ、葬り去られていたかもしれない。記録された彼らの記憶は、時代を経て現代に語り伝えられている。歴史は名前を残した人のみによって作られるのではなく、匿名の一般市民たちもまた文化の大きな担い手となってきた。そうした匿名の市民の記録を遺すことは文化の記憶を未来に遺すことでもある。久作のルポルタージュは、今日明日の急務に應える速報性・緊急性をもたないが、書かれた言葉は遠い未来に文化を伝え継承する役割を果たしているといえよう。

震災後、一〇月の初旬頃まで東京に滞在し本社へと帰った久作は、その一年後再び東京を訪れて取材し、ルポルタージュ「一年後の東京」(一九二四・九・一二)、「街頭から見た新東京の裏面」(一九二四・一〇・二〇—二・三〇)、「東京人の墮落時代」(一九二五・一・二二—五・五)を執筆した。そこでは、震災で崩壊した都市が復興へと向かう様子が描かれる一方、混乱を経て頹廢へと向かう文化への危機

が記されている。

一般に、震災前と震災後とは、東京人の風俗に一大変化を来した。改め切れなかつたものが、あの大きなショックで改められたのだと、学校当局や警視庁では云ふ。しかし、今一層此を深刻に見れば、物質的方面ばかりでなく、精神的方面にもさうである。殊に、墮落気分を持ちながら実行出来なかつたものが、あのドサクサに紛れて思い切つて墮落したとも見られる。

### 「東京人の墮落時代」(一九二五・四・三)

東京は旧時代の産物たる科学文明に依て築かれた都である。科学文明の都市——折角向上しかけた人類の精神文化の象徴たる宗教——道徳を数字攻めにして責め殺し、芸術をお金攻め、実用攻めにして墮落させて、精神美を無価値なものにして、物質美を万能にして、遂に文化的に禽獣の真似をするよりほかに楽しみを持たぬ程度にまで落ちぶれ果てた人類——その真似をするのは無上の光栄と心得る、日本人の中の罰当たりが寄り集る処——それが東京である。

同(一九二五・五・二三)

震災の混乱に乗じた文化の墮落に警鐘を鳴らすこれらのルポルタージュは、杉山萌圓または萌圓生の署名で『九州日報』紙上に発表されたが(萌圓は久作の法号)、当時彼は九州日報社に在籍してはいなかった<sup>12)</sup>。つまり久作は、記者としての職務ではなく、一人の市民として震災後の東京を訪れ、筆を執っているのである。時代の



転期に立ち会った一人の目撃者として久作が書き記した言葉は、一つの文化の記録となり、その記憶を未来へと伝えている。

——三月一日。夢野久作の命日にもあたるこの日が、後の二〇一年にまた一つ忘れることのできない震災の日となった。言葉を記録すること、文化を後世に繋ぐこと。その意味の大きさが、いま改めて問い直されている。

註(1) 「関東大震災（上） 激震・関東大震災の日」（新聞資料ライブラリー監修 大空社、一九九二・八）、「関東大震災（下） 戒厳令撤廃までの76日」（新聞資料ライブラリー監修 大空社、一九九二・八）他を参照。

(2) 九州日報社と福岡日日新聞社は一九四二（昭和一七）年に合併して西日本新聞社となった。

(3) 『西日本新聞百年史』（西日本新聞社、一九七八・三）および『西日本新聞社史』（西日本新聞社、一九五一・四）を参照。なお、一九〇九（明治四二）年に杉山茂丸は九州日報社の第三代社主となっている。

(4) 家庭欄に掲載された「鼻の表現」（『九州日報』一九二三・一一・一一・二六）などのエッセイや「豚吉とヒロ子」（一九二六・一一・一六・一三・一四）、「ルルとミミ」（一九二六・三・一六・四・一）などの童話がある。

(5) 一面では山本権兵衛新内閣発足に関連するニュースが報じられた。

(6) 「極端な個人主義 関東大震災の回顧」（『九州日報』一九二四・九・二一・三）より。

(7) (6)に同じ。

(8) 「大東京の残骸に漂ふ匂ひと気分」（一九二三・九・一五）

(9) 「関東大震災（上） 激震・関東大震災の日」（新聞資料ライブラリー監修 大空社、一九九二・八）

(10) 田村祐一郎「関東大震災と保険金騒動」（1）（『流通科学大学論集』二〇〇四・三・二〇一〇・七）を参照。

(11) なお、仏文学者の田辺貞之助（一九〇五・一八四）は旧制第一高等学校二年の時に東京で被災しているが、死体を焼く匂いを鮭を焼く匂いだと思い、空腹に堪らず匂いのする方へ押し掛けようとするが、途中で事実気づいてはじめて吐き気を催したことを回想記「関東大震災」（『江東昔ばなし』善柿堂、一九八四・六）に記している。

(12) 久作は一九二四（大正一三）年三月一日に九州日報社を退社し、翌一九二五（大正一四）年四月一日に再び入社している。

〔附記〕本文の引用は『九州日報』掲載の初出に拠った。